財団のあゆみ 114

「美術鑑賞」（その54）

2017年3月28日㈫

宇都宮・館林の美術館を訪ねて

穏やかな春の一日、宇都宮と館林に2つの美術館を訪れました。宇都宮美術館では「宇都宮美術館開館20周年記念-ベルギー奇想の系譜展」、群馬県立館林美術館では企画展「清宮質文（せいみやなおぶみ）と版画の魅力」を鑑賞しました。

渋谷を定刻に発車したバスの中、講師の沼辺信一さんの発話から研修が始まりました。私たちはこの美術研修で、実にさまざまな美術館を訪れました。「絵を見る力」はもちろんですが、「美術館を見る目」も確実に育っています。続けていると、その美術館の「どんなところが素晴らしい」「こんな欠点がある」ということがわかるようになってきます。

ところで、都内の美術館はどうでしょうか？展覧会のための入れ物になっていませんか？ぜひ海外に行ってみてください。パリ、ロンドン、ベルギー、サンクトペテルブルグ、ニューヨーク。どこもそれぞれ建物やロケーションのことも考え、もちろんコレクションや展覧会のことまで目を光らせて考えている美術館がたくさんあります。

日本でも、地方にはまだ訪れたことのない知らない美術館がたくさんあります。美術館を訪れたら、一つひとつの作品を丁寧に鑑賞するのはもちろんですが、美術館全体を見て、美術館自体を味わってみてください。その美術館の考えに触れ、そこに身を置いて時を過ごす醍醐味を知ってください。わざわざ出かけていくと、アッと驚く体験がきっと待っています。

さて、今日最初に訪れる宇都宮美術館は20世紀のデザインミュージアムにふさわしい素晴らしい美術館です。ベルギーコレクションのよりすぐりとともに味わいましょう。

宇都宮美術館にて

宇都宮美術館

宇都宮市制100周年を記念して1997年（平成9年）にオープン。里山の姿を残す緑豊かな自然環境の中に所在している。国内外、主に20世紀以降の美術、デザイン、宇都宮ゆかりの美術作品を収集・公開している。開館準備の1996年、ルネ・マグリットの「大家族」を600万ドルで購入したことが話題となった。

宇都宮美術館開館20周年記念展は、ベルギーに生まれた独自の幻想的な絵画の系譜を、現代までの500年にわたって探るというものです。ヒエロニムス・ボスが描く悪魔や怪物は迫真性に満ち、こうした表現は後の「奇想画」「象徴主義」「シュルレアリスム」と形を変え、今日のアーティストたちに受け継がれています。この一連の流れを

特産大谷石が使われた
エントランス

群馬県立館林美術館

2001年に群馬県2館目の県立美術館として開館。近現代美術、なかでも「自然と人間」をテーマとして、調和、共生、対峙など自然と人間のさまざまな関わりを表現した、国内外の作品を収集している。動物彫刻家フランソワ・ポンポンの作品も多く収蔵し、別棟「彫刻家のアトリエ」では彼のパリのアトリエの雰囲気を再現している。

群馬県立館林美術館で鑑賞した清宮質文（せいみやなおぶみ）は生誕100年を迎える木版画家で、彼の作品は穏やかで詩的な心象世界で知られています。展覧会は彼の代表作が一堂にそろい、生涯の画業をたどることができる構成になっていました。彼が若い頃魅了され影響をうけたという、オディロン・ルドンやムンクの作品、また南桂子ら日本の版画家の作

池と造形的盛土で囲まれた建物は
水面に浮かび上がる島を
イメージしている

およそ120点の作品を通して鑑賞しました。

宇都宮美術館では、企画展、コレクション展、それぞれの見どころについて学芸員の方にお話いただきました。（以下抜粋）

①企画展の大きな呼び物、ヒエロニムス・ボス工房「トゥヌグダルスの幻視」は科学調査の結果、ヒエロニムス・ボスの工房で彼が存命中に制作されたらしいということがわかりました。ボスは真筆とされる作品が20点ほどしかありませんから大変貴重な作品といえます。

②「ベルギーはドイツやフランスの間にある小国で常に戦場でした。すぐそばにある死を、強かに、時には笑いをもって、また皮肉なユーモアとして描こうという姿勢がベルギー美術には貫かれています」と本展のベルギー側のキュレーターが話してくれました。

③ルネ・マグリットの代表作「大家族」の見せ方をさまざまに取り組んできていますが、今回はベルギーの奇想という歴史の縦軸をとり、歴史の中にマグリットをおいてみようという試みです。（伊藤学芸員）

④コレクション展は5つの章立てで美術館の顔となる作品を展示しています。「絵はどれだけ説明しても伝わりません。ぜひご自分の目でご覧になってください」（福島学芸員）

昼食は道の駅うつのみやにて、地元の食材をおいしくいただきました。産直野菜や名物の宇都宮餃子などを買い求める参加者もいました。午後は館林へとバスを走らせます。

ルネ・マグリット「大家族」宇都宮美術館所蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 G0931

ヒエロニムス・ボス工房「トゥヌグダルスの幻視」
ラサロ・ガルディアーノ財団
© Fundación Lázaro Galdiano

品も展示されていて、多様な版画の魅力を感じることができました。別棟の「彫刻家のアトリエ」では、動物彫刻家フランソワ・ポンポンのアトリエが再構成され、彼が実際に使用していた家具や道具を見ることができました。彼の没後に鋳造された作品の一部もこのアトリエに置かれています。

「館林美術館は、館林という東京からそう遠くないところに15年間も存在していますが、知らない人が多いことに驚かされます。これほど良い場所はありませんね。東京にこんな場所はありません。広々としたロケーションがうらやましいです。この景色はぜひこのまま残ってほしいものです。開館は2001年。21世紀になってからの建物は、スッキリと洗練された印象でした。軽やかで自己主張しすぎない、訪れた人を落ち着かせる居心地のいい場所でした。必要に応じて窓を大きく開け外光を取り入れ、外と中を一体化させる、融合させるということが考えられています。彫刻だから外光が入っても良いのですが、置かれている作品が幸せそうに見えました。わざわざ訪ねていって本当によかった美術館でしたね。次回は9月に山陰地方の研修を予定しています。また皆さんとお目にかかればうれしいです」と沼辺さんが話を結び、バスは渋谷へと到着しました。

バリー・フラナガン「鐘の上の野兎」が
迎えてくれる

清宮質文「深夜の蝋燭」
群馬県立館林美術館寄託

フランソワ・ポンポン「シロクマ」
群馬県立館林美術館所蔵